信頼関係が創る協働型社会

奨励	真山 達志〔まやま・たつし〕
奨励者紹介	同志社大学副学長 同志社大学教育支援機構長 同志社大学政策学部教授
研究テーマ	政策実施過程研究

人間が才知を尽くして労苦するのは、仲間に対して競争心を燃やしているからだということも分かった。これまた空しく、風を追うようなことだ。
愚か者は手をつかねてその身を食いつぶす。
片手を満たして、憩いを得るのは
両手を満たして、なお労苦するよりも良い。
それは風を追うようなことだ。

わたしは改めて
太陽の下に空しいことがあるのを見た。
ひとりの男があった。友も息子も兄弟もない。
際限もなく労苦し、彼の目は富に飽くことがない。
「自分の魂に快いものを欠いてまで
誰のために労苦するのか」と思いもしない。
これまた空しく、不幸なことだ。
ひとりよりもふたりが良い。
共に労苦すれば、その報いは良い。
倒れれば、ひとりがその友を助け起こす。
倒れても起こしてくれる友のない人は不幸だ。
更に、ふたりで寝れば暖かいが
ひとりでどうして暖まれようか。
ひとりが攻められれば、ふたりでこれに対する。
三つよりの糸は切れにくい。

（コヘレトの言葉　4章4―12節）

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました、真山と申します。今日は、２０１３年度の第１回目のチャペル・アワーという、大変重要な席にお招きいただきまして本当にありがとうございます。私自身はキリスト教徒ではなく、代々浄土真宗なので、チャペルという場は慣れておりません。ましてや、奨励をするなどとは全く考えてもいなかったので、仕事柄、人前で話すのは慣れているのですが、今日は非常に緊張しております。そういうこともありまして、今日お話する内容というのは、皆さんからすると、良く言えば非常に新鮮・斬新かもしれませんが、悪く言えばピント外れ・場違いな話になるかもしれません。学長、副学長に新たになった者はチャペル・アワーで奨励をするというのが慣例になっているようでございますので、お許しいただければと思います。

今日、私がお話しようと思っておりますのは「信頼関係が創る協働型社会」というタイトルで、チャペル・アワーにもふさわしい話になればと選んだテーマです。そもそも、私の専門は学問の名前で言いますと「行政学」というものです。行政学といっても、なかなかご存じない方が多いと思いますけれども、簡単に言えば行政を研究対象にしている学問です。たとえば国の政府や地方自治体、またそれだけではなくて、行政が対応している社会、あるいは人びと、その相互関係、というところも研究対象になっております。

「協働」概念の登場

研究を始めた80年代ごろは、レーガン大統領やカーター大統領が活躍していたころのアメリカの行政の研究をしていたのですが、91年に同志社大学法学部に参りまして、たまたま担当した授業が「地方自治」という授業だったので、それ以降はどちらかというと、地方自治を研究しております。地方自治などを研究しておりますと、今日のテーマになっております「協働」という言葉が最近よく出てまいります。協力の「協」に働くの「働」です。この言葉は、日本語にはもともとなかった単語です。言ってみれば造語に当たるわけですけれど、80年代には「協働」に当たる英語によく使われたのは「coproduction」です。共に創り上げていく、生み出していくという意味合いです。ただ最近は、「coproduction」だけではなく、「collaboration」＝一緒に何かを創り上げていくという意味合いで、それが大体「協働」に相当する英語ではないかと言われていますが、必ずしも英語と日本語のきっちりとした対応は確定しておりません。

具体的にどういうことが協働なのか、ということになりますと、これにはいろいろな定義がありますが、たとえば地元・京都市の「市民参加推進条例」という条例があります。その条例のなかに「協働とはどういう意味か」ということが書いてあるのですが、それは「自らの果たすべき役割を自覚して対等の立場で協力し合い、及び補完し合うこと」と書いてあります。京都市の条例を例としてご紹介いたしましたが、全国に市民参加であるとか、市民協働に関する条例はたくさんあるのですが、そのほとんどが大体、同じような意味で使われております。今の定義・考え方ですと、いわゆるパートナーシップにも近い概念だと言うこともできると思います。

そういう意味では非常に多義的な、そしてまだ確定していない言葉・概念だと思います。しかし、一つだけ明らかなことがあります。「協働」というのは一人では成り立たない概念です。複数の人、つまり、二人以上の人がいて成り立つ概念、ということになります。となれば当然、たとえば利己主義であるとか、悪い意味で使われる「個人主義」、このようなものと「協働」という概念は、なかなか相容れないということになってきます。

相互依存と相互補完

そして、「協働」というときにどうしても外せないのは「相互依存」・「相互補完」という考え方です。つまり、自分一人で解決できる問題であれば、協働する必然性・必要性は必ずしもないわけですが、社会や地域の問題、そういったものを解決しようとするときには一人では絶対に無理です。力を合わせるわけですから、そのときにはおそらく相互依存、あるいは相互補完ということが必要になってきます。したがって「協働」ということを考えるときには、こういった絶対外せない前提というものを押さえておく必要があると思います。

たとえば、行政の世界で「協働」という言葉がよく出るようになったのはいつごろからかと言いますと、少なくとも日本では１９９５年に発生しました阪神・淡路大震災からで、そのころから一般でもよく使われるようになっています。ご承知のように阪神・淡路大震災では大都市部が大きな被害を受け、行政や政府の力だけでは大きな災害には対応できない、人びとを助けることが不可能である、ということが明らかになりました。そして全国から集まったボランティアの人たちが非常に活躍をしました。俗に言う「ボランティア元年」という言葉もできたくらいです。

それ以降、行政だけですべての問題解決ができる時代や社会ではない、ボランティアやＮＰＯ、あるいは企業など、いろいろな民間の組織も力を合わせて問題解決に当たらなくてはならないと考えられています。その概念を表したものとして、80年代以降よく使われるようになっていた「協働」という言葉が前面に出てきたわけです。

そういう意味では、行政と一般の市民、あるいはボランティアやＮＰＯ、さらには営利企業・会社などが、お互いに相互依存・相互補完をしながら、対等の立場で協力をしていく体制をつくるということが、これからの時代では社会の大きな課題になってくると言えるわけです。それがいわゆる「協働型社会」ということなのですが、しかしそこで大事なことは何かというと、理念・理屈、あるいは社会制度や法律、そういうものをつくればいい、ということではありません。それらはあくまでも前提となる条件の一つではありますが、一番基本になるのは協働する相手、協働する仲間との信頼関係があるか、ということにかかってくると思います。

信頼関係の大切さ

誰しも信頼できない人と手を結ぶことはできません。相手を疑いながら、あるいは憎みながら仕事をするということは不可能です。より良い成果、より良い結果を出すために一番重要なのは、信頼関係によって結ばれているということではないかと思います。これは言ってみれば当たり前のことですし、いまさら言うまでもないことですけれども、ただ大変不幸なことに、今、行政といわれる国や地方自治体と市民との関係は、どう見ても信頼関係で結ばれているという状況ではありません。むしろ、敵対的、あるいは場合によっては憎しみあっているのではないかというような出来事がしばしばあります。これはたとえば、俗に言う「行政批判」だとか「行政・公務員バッシング」のなかで、問題点や悪いところを指摘しそれを改善するというところを超えて、ある種、憎しみがあるかのようなバッシングが行われることが多くなっている状況にも現われています。特に、マスメディアでそういう現象が多いかと思います。

確かに行政にはいろいろと問題がありますし、大勢の公務員のなかに時として違法なことをする人が出てくるのも確かです。こういったことの問題点を指摘し、それを正していくということは当然必要です。しかしたとえば、重箱の隅を穿るような形で問題点を出してそれを批判する、ということだけでは物事が良くなることにはならないでしょうし、ましてや信頼関係を築いていくということには繋がらないと思います。

昔から、犬が人間を噛んでもニュースにならないけれども、人間が犬を噛むとニュースになる、という冗談がありますが、それと同様に、メディアの世界では行政の社会的貢献はニュースにはならないが、行政が問題を起こすとニュースになると言われています。つまり、行政あるいは政府というのは悪いものだという性悪説に立ち、それをいかに強調して書くかがメディアの仕事だというような動きになっています。こうなってきますと、人びとはどんどん行政に対しての信頼感を失くしていきます。しかし一方で「協働型社会」を創っていかないと、今の日本、これからの日本の社会的問題、地域の問題を解決できないという状況もあります。そのジレンマを解決していくときにメディアの役割も重要です。他にもいろいろなことを考えてもらいたいと思いますけれども、一人ひとりの市民が行政に対してもう少し冷静かつ客観的に目を向けていただきたいと思います。私は別に行政の回し者でもないですし公務員でもないので、別に行政の肩をもつとか、そういう意味ではないのですが、「協働型社会」を創っていく時に、憎しみのような感情をもった社会では「協働型社会」は確立できない、生み出せないという思いがあります。それをなんとか変えていきたいと思っております。

多くの方々は一人ひとりの個人のレベルで、自分の仲間・家族・周辺にいる人たちに対しては、いろいろとその人のいいところを見つけ、信頼関係を築こうという意識をもつのですが、たとえば政府・行政といった組織や集団に対しては、なかなかそういった感情をもちにくいのだと思います。残念ながら、行政はどうしても組織的に仕事をしますので、一人ひとりの公務員という意識で行政を見ることは難しいと思います。集団としての公務員、組織としての行政について、市民の皆さんが、どういう社会貢献をしているのか、逆にどこにどんな問題があるのか、それはどうしたら解決・改善できるのか、こういったことをじっくりと、そしてしっかりと検討していただくと、信頼に基づいた行政と市民の関係が築けると思います。

こういった市民と行政の信頼関係が、比較的日本よりは古くから確立されているのは、一般的には欧米社会だと思います。それは市民社会が形成された経験をもつからだと思います。日本は残念ながら、いわゆる市民社会というものが完全に形成されたことが、歴史的にありません。そういう意味では、市民社会の基盤となっているさまざまな社会的思想・文化・そして宗教を、もう一度日本でもしっかりと検討し、日本社会にあった形での新しい信頼関係の創り方というものも考えていかないといけないなと思っております。

同志社大学の良心教育は、そういったものを目指す一つの大きなきっかけになると思います。私も同志社大学の一員といたしまして、その一助になれればと思っております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。本日は本当にありがとうございました。

2013年4月9日　今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録